
幻影

水瀬藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻影

【Nコード】

N4638H

【作者名】

水瀬藍

【あらすじ】

二人が囚われた幻影。そのなかで、大切なものを見つける物語。

梅雨どきの放課後、学園の昇降口からは次々と雨傘を差した生徒たちが吐き出されていく。期末考査の真つ最中で部活動も委員会もない。そのため、普段の倍近くの間人が足を揃えて帰宅の途についていた。

雨覆いの下で雲行きを窺っていた橘恭也は、覚悟を決めたのかどうか、緩慢とした動作でおんぼろの折りたたみ傘を開いた。土砂降りのうえに風が強く、数メートル先も確かには見えないほど視界が悪い。濡れずに帰るのは、ほぼ不可能だろう。ひとつ鬱々とした溜め息を吐き出すと、仕方がなく外に飛び出した。

地元組の恭也は徒歩で学園まで通っている。ほんの二十分程度の距離では自転車通学の許可は下りないのだ。駅に向かう大半の生徒とは真逆、住宅街に続く裏道へ足を速めた。

近道の緑化公園を真っ直ぐに突っ切ろうとする。朝方は犬の散歩やジョギング、夕方は子供たちの喚声で賑わうのだが、雨の日には同じ場所とは思えないほどの変容を見せた。木造の休憩所の屋根は水しぶきに悲鳴をあげ、整備された広場は泥水の池と化す。木々の緑葉は頭を垂れてじっと耐え忍んでいる。

足元を泥が跳ね回るのも構わずに駆けていると、ふと視界の端に人影が映った。吹きさらしのベンチに座って、傘も差さずに水責めを受けている少女。

恭也はそれを無視して通り過ぎようとした。他人と関わるのは好きでないし、心配してやるほどお人好しでもない。しかし、少女の見知った横顔が恭也を立ち止まらせた。

「立花、沙樹？」

俯いていてはつきりとは分らないが、恭也は確信した。学園内で顔を覚えている女子など数えるほどしかない。加えて試験日だというのに欠席していたから、なおさら印象が強かったのだと思う。

「おい、立花……どうした」

沙樹の様子は尋常でなかった。肩まで下ろされた黒髪は大量の雨水を吸って重くなっているし、夏服のブラウスはびしょびしょに濡れて下着が透けていた。それだけなら濡れ鼠だが、真面目だと評判の沙樹が服装を乱している。胸元のボタンは千切られ、スカートの襷も破かれていた。

その違和感を不可解に思ったのは一瞬で、途端に最悪の光景が脳裏に浮かぶ。

「どうしたっ！ 何があった!？」

役立たずの折りたたみ傘を放り出し、沙樹の肩を掴んで強く揺さぶる。それでようやく恭也に気づいた沙樹は、うつろな瞳を向けた。

「橘……くん……?」

「何があったんだよっ!」

強い調子で問いただそうとする恭也に対して、ばつが悪そうに視線を逸らしてから沙樹は力なく呟いた。

「……関係ない、でしょ」

「だからって放っておけるわけないだろっ!」

「……なに？ あんたもやりたいの?」

全く感情の込められていない声で、唐突に吐き捨てる沙樹。その意味するところを理解して、恭也の差し伸べた手は凍りついた。

「なんだよそれ……お前、まさか……」

「——そうよ、犯されたの。連中、あんたにやられたこと、かなり根に持ってたらしくてね。今度は五人がかりよ。ほんと笑っちゃうわよね、小娘一人ごときに……あははっ」

狂ったように笑い出す沙樹の痛々しい姿を、恭也は直視できなかった。いつかに刻まれた恐怖と絶望が、ふたたび心を支配しようとする。封印したはずの忌々しい記憶が、形を伴って蘇ってくる。

「散々よ……なんで、あたしが……こんな……こん、な……」

「立花……」

「なんで、こんな目に遭わなきゃなんないのよっ！ あいつらをボ

コボコにしたのは、あんたじゃない！　なんであたしがつ……どうしてくれるのよお！！」

理不尽な暴力に対する怒りを精一杯に振り絞って、沙樹は恭也を睨みつけた。こんなとき『どうすればよかったのか』わからない。必死に訴える掠れ声が、両手の拳で叩かれた胸に鋭い痛みを生んだ。

「う……あぁっ……！！」

どこか遠いところで聴こえた『彼女』の慟哭が目の前に重なり、恭也を責めたてる。誰も知らない、誰も許すことのない罪に、押し潰されそうだった。

呆然と立ち尽くす恭也に泣きじゃくって罵声を浴びせかけていた沙樹が、急に力をなくして崩れ落ちた。

「おい、しっかりしろ。おいっ！　——くそっ！」

慌てて抱きかかえるが、沙樹は意識を手放していた。長いこと雨に打たれて体力の限界だったのだらう。身体は冷えきり、唇は血の気を失って紫に変色している。

途方に暮れて恭也が仰いだ梅雨の空は、大切なひとを奪っていった秋雨の空と、よく似ていた。

気を失った沙樹をおぶって帰ってきたのはいいが、まだ目醒める様子は見えなかった。この季節には珍しく冷たい空気を温めようと、エアコンの暖房をつける。とりあえずリビングのソファに沙樹を横たえて、髪の毛や顔や首筋や手足を軽くタオルで拭いていった。身体を心配するなら、制服を脱がしてやったほうがいいのだろうか、とても手が出せなかったので、代わりに薄い毛布をかけた。

割合に沙樹が落ち着いているように認めると、恭也は軽くシャワーを浴びて着替えた。ついでに風呂を沸かしておく。そうして、考える暇もなく動かしていた手が他にすることも無くなって空くと、ようやく恭也は腰を落ちつけた。

家の中にまで響く雨音が嫌に傷跡を刺激して、それを打ち消そうとテレビでもつけようかと思ったが、あまりにも白々しい気がしたので止めた。仕方がなく、沙樹と向き合う。

日常——それは変わり映えなく、平凡で退屈なものかもしれない。だがそれこそが一番幸せなことなんだと、大切にかけがえのないものだと思っている。儚くて壊れやすいものだと思っていた。

（——立花の日常を壊したのは誰だ？ 俺のせい、なのか？）

風紀委員会の見回りをしていたときに、不良に絡まれている沙樹を恭也が助けたことがある。人の話がわかるような連中じゃない。暴力に訴えるのは決して誉められたことではないが、他に方法もなかったのだ。それとも見て見ぬフリをしていれば、まだマシだったとでもいうのだろうか。少なくとも傷は浅かったというだろうか。

「んっ……うんっ……」

かすかな呻きと身じろぎによる皮革の軋みに、はっと顔を上げる。暗い気持ちを心の底に沈めて、恭也は普段どおりの物言いをした。

「やっと思きたか」

「え、橘くん——っ!？」

覚醒した瞬間、間近に異性がいるという単純な驚きに顔を赤くした沙樹は、急激に青ざめると息を吞んで身を固くした。見開かれた目には、男に対する恐怖と嫌悪の色がはつきりと映っている。

「そんなに警戒するなよ——」って言っても無理だよな。公園で倒れたから仕方なく連れてきただけだ。誓って何もしてない」

沙樹にとっては説得力の欠片もない言葉だろうが、不思議と疑いの視線は向けられなかった。だが信頼されているとは、自惚れでも思わない。恭也にとって都合のいい、ただの錯覚だ。

「……放っておけばよかったのに」

「あれだけ責められて、放っておけるわけないだろ」

公園での叱責とは対照的に、苦笑しながら恭也は言う。沙樹は唇を強く噛み締めることで応えた。その意味するところは何だろうか。「風呂、沸かしてある。貸してやるから、とりあえず入って来い。濡れたままだからな、よく温まらないと風邪ひくぞ？」

「……そんなの、いまさら……」

「お前が意地を張るのは勝手だけどな。家に連れて帰ってきた俺の責任だ。最後まで面倒くらい見させる。ほら、こっちだ」

返事も待たずにソファから立ち上がって、洗面所の電気を点けに行く。渋々だろうが、弱々しい足取りで沙樹はついてきた。

「何よ……男のくせに……」

沙樹が男嫌いを公言して憚らないことは恭也も知っている。それなのに今日に限って、小さな呟きはやけに胸の奥を抉った。

どこから引つ張ってきたのか、新品のアメニティーと女物の着替えを押し付けて、恭也は脱衣所の扉を閉めた。だが取り残された沙樹がすぐに浴室に入ることはなかった。服を脱ぐという一動作が酷く億劫だったのだ。その理由が気だるさからなのか、裸体を晒すということへの拒否反応なのかは分からない。

閉じられた空間に立ち尽くしていると、世界に独りぼつちな錯覚に襲われる。あまりに深い静寂に私の感覚が研ぎ澄まされ、ふと洗面台の鏡を見やった。

「——っ！」

沙樹自身でも見たことのない顔に、衝撃を受けた。痛々しいほどに腫れた真つ赤な目、乾いた涙が張りついた頬、色素を奪われた唇。その様は死相を浮かべているようで何よりも、瞳の奥に潜む濁った光には恐怖すら覚えた。

そして突然、外の感覚と中の感覚がリンクする。寒いと思った。痛いと思った。辛いと思った。ナカで溶ける男の感触が、気持ち悪いと思った。

猛烈な吐き気と焦燥感が湧き出してくる。制服も下着も、蜚るようにして剥ぎ取り、床に投げ捨てる。浴室に飛び込んでシャワーの栓を捻ると、刺すような冷たさも厭わずに頭から聖水を被り、沙樹は嘔吐した。

やがて柔肌を流れる水が熱さを増すにつれて、だんだんと感情は冷めていく。

（あたし、ホントに犯されたんだ……）

目が醒めたとき、夢だと思った。恭也に寝顔を見られた恥ずかしさと、いつになく近い距離に照れくさを覚えて。そんな普通の感情に満たされた沙樹は、悪夢だと思いたかった。しかし自動的に再生される陵辱の映像がある。記憶に刻まれた動画は削除することも

叶わないのだ。

朝登校すると、学園の校門で待ち伏せに捕まって、強引に旧校舎まで連れて行かれた。初めは思いきり抵抗していたが、振り下ろされる拳に女は逆らえない。結局、心が折れて諦めてしまった。泣いても喚いても新校舎まで声が届くことはない。誰も助けてはくれないのだと悟ってしまったから。絶望した沙樹の様子さえも連中を悦ばせるだけで、飽きることなく代わる代わる何人もの男に犯され続けた。カラダのどこもかしこも手垢と唾液と精液に塗れて、汚れたという表現がお似合いだ。

涙をシャワーに流しながら、沙樹は全身を丁寧に洗っていった。犯された事実が消えるわけではないが、せめて表面だけでも綺麗にしたい。石鹸をありったけ使って、何度も何度も洗いなおす。けれど皮膚が赤くなるまで擦っても、痛みを感じるほど掻きだしてみても、痕跡が消える気はしなかった。

どれくらい無駄な行為を続けただろうか。虚しさが膨らむと、スポンジを握る手の力は弱くなっていった。そうして目を向けた先に、沙樹は一筋の希望を見つける。

（……そっか。死んじゃえば、もう苦しくないかな……）

それは短絡的でありきたりな発想だったかもしれない。死んだら楽になれると、本気で思ったわけでもない。ただ誰もが考えるように、自然と浮かんだ逃避だった。

シャワーの音が止んでから暫くして、リビングの扉が開いた。何気なくそちらを見やった恭也は、強烈な幻覚を目の当たりにして、ひゅつと息を詰まらせた。貸し与えた衣服を身に着けた沙樹は、特に似たパーツがあるわけでもないのに『彼女』と同じような空気を纏っていたのだ。後ろ手に扉を閉めた沙樹は、強張った表情のまま肩にかけたタオルの端を掴んで立ちつくしている。

お互い自身にしか分からない気まずい沈黙を破ったのは、まず恭也だった。

「――落ち着いたら、病院行くぞ」

わずかな逡巡を見せて、けれども素直に沙樹は頷いた。その後で不意に疑問をぶつけてくる。似たような問いを何度も訊かれたが、また意味合いは違っているように思えた。

「どうして、こんな面倒見てくれるの？」

「何回も言っただけだな。放っておけるわけないだろ」

「でも……もし死なれたりしたら、後味悪くなるでしょ？」

ぼつりと零れた自虐的な言葉は、沙樹の意図するところを超えて、恭也の心に突き刺さった。公園で拾ってからずっと『彼女』に糾弾されているような気がしていた。その原因が解った。

「あたしね、さっき死のうとした。剃刀みつけて……なのに死ねなかった。あたしには、そんな勇氣なかった」

沙樹の告白に心臓が跳ねる。恭也は自分の迂闊さを恥じた。どうしてシャワーを浴びたときに気が回らなかったのか。生きていてくれたことに安堵を覚える一方で、行き場のない怒りも湧き上がった。「死ぬのに、勇氣なんて……どうかしてるだろ。残される奴の気持ちじゃ想像できるなら、そんなこと出来ねえよ」

決して沙樹を責めたいわけではなかった。だが恭也の口は、無意識に恨みがましい色の声を発していた。

「だったら、どうしろっていうの？　こんなこと誰にも言えない。言ったら、みんな腫れ物に触るみたいになるもの！　でも、だからって平気でいられるわけじゃないじゃないっ！　好きなひとがいても、心で許しても、身体は拒絶するの！　そんなあたしを——誰があたしなんかのこと愛してくれるっていうのよっ！」

息を乱して両の拳を握りしめた沙樹が、じっと見つめてくる。持て余す感情に揺れる瞳から、どの真実を読み取ればいいのか、恭也には分からなかった。

「そんなこと、わからないだろ」

「わからなくない。いま支えてくれるひとがいなきゃダメなの……側に居てほしいの！」

あの日の『彼女』と同じ叫び。あの日の『僕』と同じ立場。恭也は運命を呪い、そして感謝した。

「——俺が支えてやる。お前が立ち直るまで、他の奴が支えてくれるようになるまで。だから、死ぬとか言うなよ……」

偽善かもしれない。ただの自己満足かもしれない。それでも目の前の絶望が少しでも薄れてくれるなら。恭也はそう願った。

(……なんで？　なんで、そこまでのの？)

沙樹は戸惑っていた。自ら引き出した台詞とはいえ、この状況でその言葉が何を意味するか。間違えて解釈されたのでなければ、恭也にだって解ったはずだ。ただ付き合えばいいわけじゃない。支えるというのは、自分の全てを相手に捧げるということ。それは自己犠牲の上に成り立つものだ。

「な、んで……？」

呆然とした声に、恭也がはっと我に返る。沙樹から視線を逸らし、何事か言おうとして躊躇した。ソファから立ち上がると、閉め切っていたカーテンを無造作に開け放つ。

数秒が無限にも思えるような静寂。蛍光灯の音が傷に触れた。時計の音が胸を叩いた。そして、かちりと目と目が合う音が聴こえた。「――病院に行こう。歩きながら、話す」

恭也は言って、苦笑いのような痛みを堪えるような、不思議な表情をした。見やった窓の外には、雲を洗い流して澄んだ茜色をした、綺麗な夕空が広がっていた。

* * *

奇妙な感覚だ。後悔しながら生きる日々は疾うに終えたはずだが、こうして姉と歩いた道を辿っていると、やるせない想いが重なりだす。

沙樹のために無我夢中だったとはいえ、いまだ整理をしていない姉の部屋に立ち入ったこと。そうして封印したはずの記憶に触れてしまったこと。過去という濁流に攫われてしまいそんな心をかろうじて繋いでいるのは、自己満足でしかないが沙樹への思いやりだ。より不幸なひとが身近にいるというのは、歪んだ安心感を与えるも

のかもしれない。

「姉さんがな……」

赤信号で立ち止まったのをきっかけに、恭也は嚙んでいた口を開いた。

「……自殺したんだ」

「——っ!？」

強烈な切り出しに、沙樹が息を吞んで恭也を見詰めた。

「三年前の事件、知ってるか？ 学園で起きたやつ」

「……うん。母さんが教師だったから」

全国紙に取り上げられるほどの大事件。集団レイプ、そして被害者の自殺。十数人にも及ぶ男子生徒の狂気と無責任なマスコミのせいで、三人の女子生徒が命を散らした。

「あれの被害者だ」

「……そっか」

「あのとき、姉さんが言ったんだ。一人じゃ怖いって、俺に支えてほしいって。でも俺は受け止められなかった。だから——」

(……同情、か……)

淡い期待感を裏切られて、沙樹は落胆した。同情されるのは嫌いだ。それは相手のことをちゃんと見ていないってことだから。ただ――

信号が青に変わって、沙樹は横断歩道に足を踏み出す。どこか自虐的な笑みが零れて、怪訝そうに窺う恭也の視線を感じたが、振り返らなかった。

強姦に遭ったのは沙樹も同じだ。自殺を決意するほどの絶望に満たされて、それなのに心のなかで輝くものがある。不良に絡まれていたところを助けて貰って、お礼も言わないで可愛くない言葉を返してしまったけれど、初めて恭也と話すことができた。人生最悪の日に、使い捨てられた沙樹を拾って面倒まで見てくれた。そしていま、痛みを伴うだろう過去を明かして、支えになってくれようとしている。

死にたいのに。可笑しいのに。なんで嬉しいと思えるのだろう。卑怯じゃないか。こんな状況でどうして断れるというのだ。

(だって、あたしは恭也のことが好きなんだからっ！)

この関係は、この感情は、恋愛なんていえない。それでも酷い目に遭ったせいで恭也に近づくことができた。絶望感は別にして、それは確かに喜ばしいことだ。だが素直に受け入れるなんて無理に決まっている。

沙樹を犯した連中はどうでもいい。恨んでも、殺したいほど憎んでも、何も変わらないのだ。けれど、汚れてしまった自分の身体は許せなかった。途中で抵抗を諦めてしまった自分の心が許せなかった。

だから言った。恭也の方を見ないようにして、沙樹は必死に言葉を紡いだ。

「……ごめん。あたし、橘くんに甘えることできないよ。お姉さんとは違うもの。支えてくれるって言葉だけで十分だから。それだけで嬉しいから。大丈夫、もう死のうとしたりしないから……」

偽りの想いを告げた沙樹は、苦勞しながら寂しげな笑顔を浮かべてみせた。

差し伸べた手が必要ないと拒絶されて、恭也は呆然とさせられた。沙樹が無理をしているのは一目瞭然だというのに、決して手を取ろうとしない。それは強さなのだろうか。

繰り返さないために、後悔しないために――やり直すために。沙樹に姉を重ねて、恭也が応え直した正解のつもりだった。だが、答え合わせの結果は残酷だ。

（……また、間違えたのか？ 俺には何も出来ないのか？）

無力感に打ちのめされて、返す言葉もなく道なりに歩いていると、間もなく目的のレディーススクリーンツクが見えてくる。建物の看板を確認すると、沙樹は足を止めた。

「ここでもいいよ、ありがと」

「いや、最後まで付き合うよ」

沙樹が距離を置こうとしているように感じてしまい、恭也は申し出たが、簡単に振られてしまう。

「うつん。その、男子とふたりでって、ねえ？ 恥ずかしいし……」
「恥ずかしいという以前に、状況からすれば青ざめていてもおかしくないのだが、頬を赤らめて言う沙樹は、いたって『普通』にみえた。」

「この服、お姉さんのでしょ？ 洗って返すね。あと、脱衣所に制服があるんだけど……捨てておいてくれるかな？ もう、着られないから」

「……ああ、わかった」

いま気遣わなくてもいいことを沙樹は捲くし立てて、あっさりと終演の幕を引く。

「それじゃ……本当にありがと。ごめんね」

慰めの言葉ひとつ言えずに、恭也は離れていく凜とした後ろ姿を見送った。結局『どうすればよかったのか』わからないままに。

薄暗闇のなかに意識だけがあった。身体感覚は心細いほどにしかなく、浮遊感すらを感じている。一度『見た』ために冷静な自分。二度も『見る』羽目になって混乱している自分。この光景を沙樹は知っていた。

手足は壁に打ち付けられた鎖に繋がれている。口は塞がれていないが、自由を奪われる恐怖のために擦れた声しか出てこない。沙樹の怯えた目に映るのは、ぎらついた目つきをした飢えたオスが五匹。おもむろに近づいてきた男が、制服の胸元に手をかける。そこで沙樹は初めて、犯されるのだと理解してしまった。途端に生じた衝動で精一杯の抵抗を試みるが、無駄なことだと悟っていた。手足に食い込む痛みは、全く気にならなかった。

誰かに後ろから羽交い絞めにされたかと思うと、目の前に歪んだ笑みがあつた。太ももを撫で回される感触に悪寒が奔り、差し込まれた舌のぬめりに吐き気を催す。

抵抗の途中で偶然ながら、男の顎を沙樹の肘が強打し、逆上した男は平手を何度か頬に打ちつけた。響く渴いた音と広がる熱い感覚。乱暴に犯される様を想像して大人しくなった沙樹を見て、男たちは高笑いを上げた。女を征服する悦びの声だった。

いかにも親玉らしい男が躊躇いもなく醜いモノを露出して、沙樹の口元にあてがった。目を閉じて顔を背けても、強引に口を開かされ突っ込まれる。必死に吐き出そうとして、また手が振り下ろされた。手下の男たちはニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながら、煽るように冷やかしの野次を飛ばした。

悲痛な叫びも苦痛の呻きも、舌の動きは男に快感を与えるだけで、沙樹自身の意志ではないのにそう『している』ような暗い錯覚すら覚え始める。敏感な秘所を指で弄られ舌で舐られると、濡れはしなくても身体は反応してしまうのだ。息が荒くなり心臓も煩く鼓動を

立てるのは、決して興奮などではなく恐怖によってだ。だがしかし、男どもを悦ばせているという現実が、沙樹を罪深くするような気さえした。

そして唐突に、四つん這いにされて腰を掴まれて間もなく、下腹部を異物が引き裂こうとする激痛が襲った。重い感覚と同時に理解が広がると、沙樹は壊れた。

本当の意味で犯された瞬間から、もう中の意識はなかった。自我を放棄して求められるままに性を差し出す奴隷。理性を殺せば、本能としての欲望を満たすだけだ。それで十分に、沙樹は快樂へと逃避することが出来た。

外の意識は、晒しだされた罪の幻影を直視しなければならなかった。絶望に囚われたとはいえ、無抵抗に穢れを浴びる姿は到底許せるものではない。恭也が差し伸べた手を取らなかった理由が、改めて心に刻まれた。

（やめてよ……お願い、もうやめて。あたしが悪いから、わかったから！ 助けてほしいなんて思わないからっ！ ——もう止めてっ！！！！）

『——いやあっ！！』

脳裏に響いた悲鳴が、沙樹を悪夢から目醒めさせた。布団を跳ね除け、見やった時計の針は五時前を指している。日の出が早い夏は、雨上がりの眩しい日差しをカーテンの隙間から届けているが、それでも起きだすにはまだ早い。

荒くなつた息を整えながら、沙樹は怯えたウサギのようにきよろきよろと辺りを見渡した。何もかもが見慣れた自分の部屋。誰にも侵されることのない安全な場所を見とめる。

「はっ、はっ……ゆ、め……じゃない、か」

わずかな安心を得ながら、悪夢を見たのだという都合のいい解釈をしかけて、そうではないと頭を振る。全身が冷や汗で濡れ、怖気から沙樹の身体は震えてさえた。

（……夢でも、あたしを犯すの？）

泣きだしそうに沙樹の顔が歪む。零れ落ちようとする涙を気丈にも堪えると、代わりに急激な吐き気が襲ってきて、急いで部屋を飛び出した。寝巻きのネグリジェのまま洗面所に駆け込むと、躊躇もなく思い切り嘔吐する。

「うっ、うえっ！ ごぼっ、げぼっ……はあはあ」

蛇口を捻って、掬い取った冷たい水で口をすすぎ、顔を上げて鏡を覗けば、恭也の家で見つけた青褪めた立花沙樹がいる。

頭のなかを『つわり』という単語が過ぎったが、そんなわけはない。初心な娘じゃあるまいし、最低限そういう知識はある。処方して貰ったピルだって飲んだのだ、妊娠することなんてありえない。

ありえないとは解っているのだが、連中に孕ませられるという想像をただけで、胃袋が痙攣を起こす。そうしてまた沙樹は背中を丸めて、空っぽの心を搾り出した。

何事もなかったかのように寝起きのポーズを見せ、予備の制服に着替えて、食欲はなくとも朝食を摂る。沙樹自身の違和感は置いておくとしても、母の目には普段どおりに映るよう努力したのだが、無駄だったかもしれない。普段どおりなら、学校に向かう時間は疾うに過ぎていく。まだ部屋のベッドで寝転がっている沙樹を、母は不審に思うだろう。

親友の古川美里や柚原涼子は電車組のため、地元組の沙樹は毎日一人で通学していた。しかし今日に限っては、誰かと一緒に登校したいと強く願う。また待ち伏せに遭ったら、どうしよう。そう考えると恐怖心が頭をもたげて、外に出られなくなってしまったのだ。弱虫な自分を持て余して、怯えながら安全な場所で閉じ籠っていると、突然に呼び鈴が鳴り響いてビクリとさせられた。

『はいはい、お待ちくださいねえ』

階下から間延びした母の声とともに、パタパタというスリッパの音が届く。

緊張の糸を断たれて、息を大きく吐くと、沙樹は天井を睨んだ。目を閉じれば、今朝の——いや昨日の悪夢と、恭也の顔が思い出される。正直に言くと、少しの後悔はあった。もったいないというべきか。資格なんてないのは重々承知だけれど、それでも恭也を傷つけてしまったことへの罪悪感があった。お姉さんの代わりにはなりたくなかった。傍にいられるだけでも幸せだとは思う。一方でひとりの女の子として見てほしいという、分相応な願いもある。

玄関のドアが閉じ、木造の階段が軋む。廊下をスリッパが滑り、ノックをしてから母が顔を覗かせて言った。

「沙樹ちゃん、お友達よ？」

沙樹を呼びに戻る女性を見送って、恭也は息をついた。母親だとは思うが、予想していたよりもずっと若い。自身ですら意外と感じる行動に、柄にもなく緊張しているのだろうか。後ろめたさもあるかもしれないが、なんとなくそわそわしてしまった。

沙樹と別れて家に帰ってから、恭也は考えた。頭が真っ白になって何もわからないなりに悩んで、ようやく思い立ったのは、結局のところ自分本位でしか沙樹を見ていなかったということだ。

過去に縛られて、気持ちを押し付けてしまったことを反省した。

同情だけなら、その他大勢の反応となんら変わらない。そんな想いを沙樹は望んでいないだろう。けれども誰かが支えてやる必要はある。恭也は経験として知っていて、その重みも分かっているつもりだった。だから沙樹にとって迷惑だとしても、絶望するよりはいい。いったん閉じられた扉から、今度は制服姿の少女が現れた。恭也の姿を確認して、心底驚いたらしく戸惑っている。

「な、なんで橘くんが——」

「なんでって、迎えに来た。一人じゃ学校なんか行けないんじゃないかって思ってたな」

「……余計なお世話よ。申し出はお断りしたはずだけど？」

つつけんどんな口調だが、声が震えているのが丸わかりだ。この調子では多少強引でも引つ張ってやらなければいけないか。

「そもそも、どうして家知ってるの？ 友達にだって教えてないのに」

「そんなこと、どうでもいいだろ。さっさと行くぞ、遅刻する」

沙樹の抗議を無視して、先を歩いていこうとする。一緒になくとも、恭也が近くにいただけで効果はあるだろう。だがすぐに、悲鳴のような静止の声で足を止められた。

「ま、待ってよ！ あたしは……」

振り返ると沙樹は俯いていた。震えを戒めるように身体を抱き、揺れる瞳を彷徨わせて迷いをさらけ出している。

不登校の分岐点。恭也は、冷たく聞こえないように気をつけながら言った。

「気持ちとは分かるけどな、我慢しろよ。一回休むと癖になるし、家族とか友達とかに心配かけたくないだろ？」

「……そう、よね」

沙樹の苦渋の返事にも満足して、さっさと歩き出そうとする。しかし制服の袖を引っ張られて、ふたたび足踏みをした。

「あ、あの——」

沙樹が何か言おうとして口ごもる。恐怖心や不安感に襲われて、心許ないだろうことが伝わってきた。

「なんだ、手でも繋ぎたいのか？」

重い空気を吹き飛ばすようにからかいの言葉を発したが、沙樹は途端に顔を赤くしてぎゅっと袖を掴む手に力を込めてきた。その反応に、恭也のほうが却って困惑してしまう。弱っているとはいえ、クールビューティで知られている沙樹の意外な一面を発見してしまった。

「……ほら」

試しに右手を差し出してやると、躊躇いがちに恭也の手を握ってくる。

「へえ……」

「な、なによ」

妙な感心をする、沙樹は睨みを効かせた上目遣いで間近から恭也と目を合わせた。

「いや、お前にも可愛いところがあるんだな、と思ったただけだ」

「……失礼ね、バカ」

言葉とは裏腹に、内心の不安を誤魔化すかのように、沙樹は重なった手に強く力を込めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4638h/>

幻影

2010年10月11日22時53分発行